

私だって
恋がしたい♡♡

藍沢深悠の場合



あいざわ みゆ
藍沢 深悠

- ・天才と称される美術部の少女。
- ・落ち着いた物腰で冷静な性格。
- ・勉強はかなりでき、運動もそこそこ。
- ・外的な評価に本人の独特な雰囲気も相まってほとんど人が寄り付かない。
- ・美術部は元々人数も多かったが、彼女の入部以降、幽霊部員が増えていった。
- ・本人は特別天才だとは思っていない。
- ・Hなことはあまりよく知らない。

「おや、新入生かな？」

「私とお付き合いしよう、後輩くん。」


「ふふっすごい勢いで射精したね。」

主人公

- ・最近入学したばかりの新入生。
- ・有名な藍沢のことは一方的に知っており、彼女のいる学校を選んだ。
- ・絵に関して悩みがあり、あの藍沢深悠なら何かヒントを得られるのではと考えている。

私だって
恋がしたい♡♡

藍沢 深悠の場合



序盤サンプル



藍沢深悠(あいざわ みゆ)
学生でありながら、多くの賞やコンテストで入賞し、
同世代でなくとも彼女を“天才”と呼ぶ声は多い。

俺がこの春入学したこの学校に、彼女は在籍している。
いや、むしろ、彼女がいるから
この学校を選んだという方が正しいか。



彼女なら、何か変えてくれるかもしれない。
そう思って、俺は美術室の扉を開いた——

「失礼します。」



「ん？どうぞ。」
「あ……。」

そこに居たのは写真やコンテストで見て、
思い描いた人物、藍沢深悠だった。

「おや、新入生かな？」



「はい。先日入学したばかりです。」

「なるほど、じゃあ入部希望者かな？」

「ああ、はい。」

「入部届は持ってきた？」

「はい。」

な、なんだか緊張してきた……。それにしても他の人は？



「他の先輩はいないんですか？」

「うん？部にはいるけど、もうほとんど来てないね。」

「なんでかは、よく知らないけどね。」

「そうなんですか……。」

そうなのか。まあ、そのほうが恥ずかしくないかもしれない。



「あの、藍沢先輩。」

「ん？なんだい？」

「ちょっと相談に乗ってもらってもいいですか？」

「？構わないよ。」

いきなり相談とは一体なんだろう？

まあ、ここは先輩として相談に乗ってあげるとしようか。



「これを、見てもらってもいいですか？」

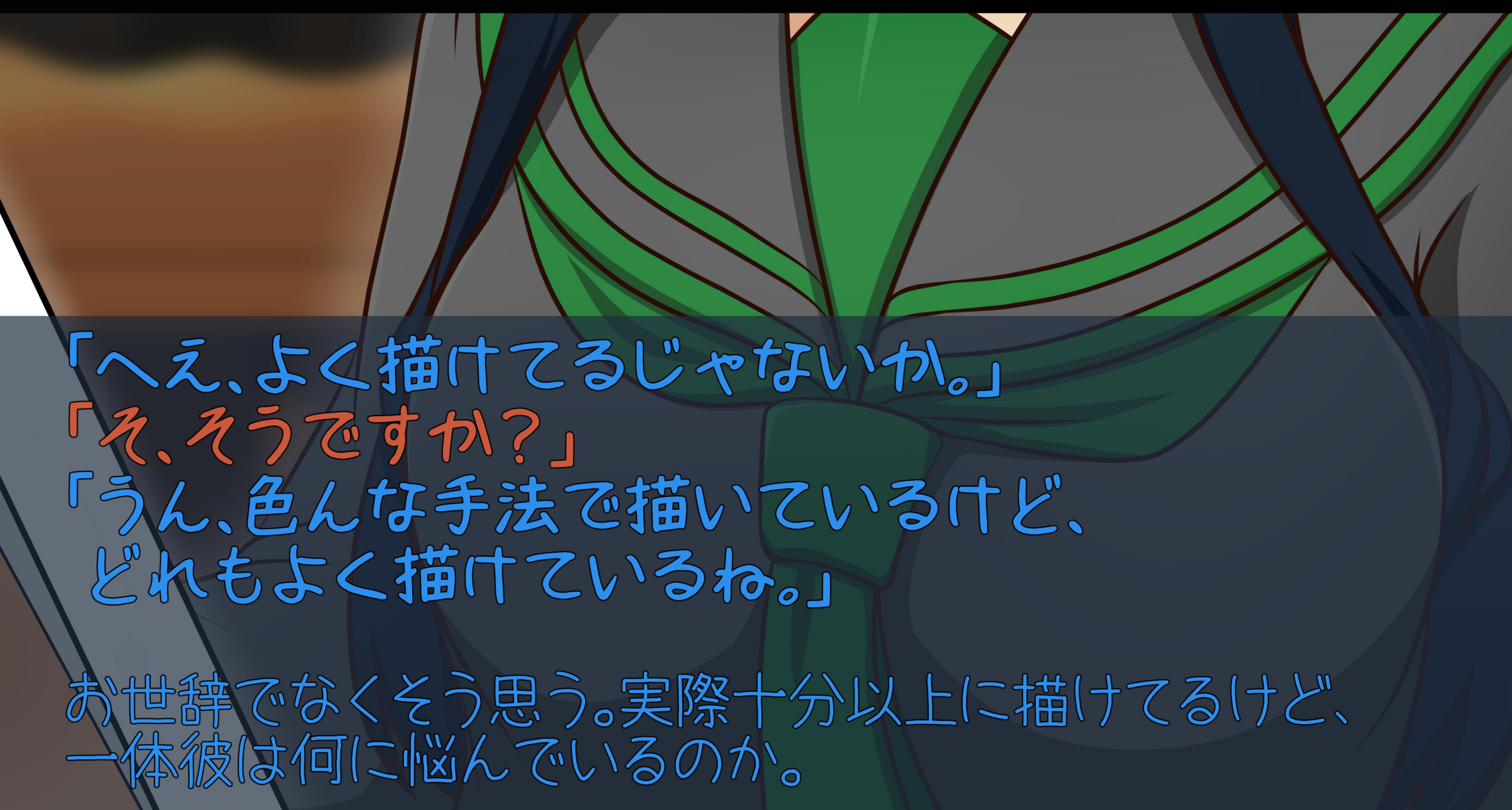
「ふむ、これは？」

「俺が今まで描いてきた作品をまとめたものです。」

「なるほど。」

渡されたのは一冊のファイル。

中には彼が今まで描いた作品を写真に撮ったものだった。



「へえ、よく描けてるじゃないか。」

「そ、そうですか？」

「うん、色んな手法で描いているけど、
どれもよく描けているね。」

お世辞でなくそう思う。実際十分以上に描けてるけど、
一体彼は何に悩んでいるのか。



「これで何に悩んでるんだい？」

「その……何を描けばいいのかわからなくて。」

「ふむ。……なるほど。」

確かにそう言われてみれば、模写であったり、
同じ物を違う手法で描いていたりなど、オリジナルは無い。
うーん。言いたいことはわかるけど、どうしたものか。



「なるほどねえ……。」

「その、どうしたら良いのかなと。」

「好きなものを描いたら良い。」

「というのは違うんだらうね。それが無いんだから。」

先輩には一応悩みが伝わったみたいでよかった。

”あの“藍沢先輩は一体どう答えてくれるのか。



「ふむ……そうだなあ……。」
「……。」

先輩はしばらく黙り込んで考えていた、そして——
「よしっ良いことを思い付いた。」



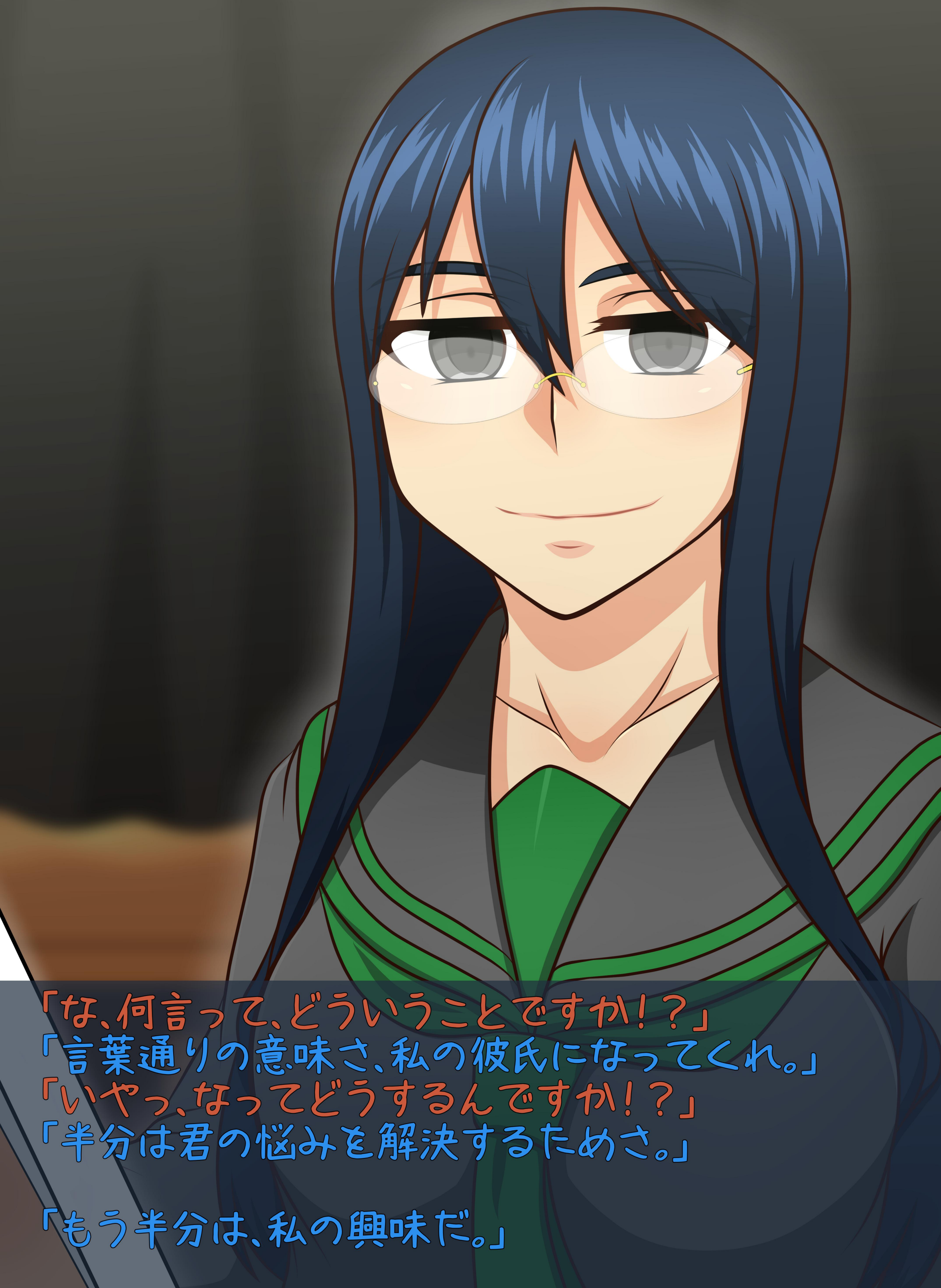
「私とお付き合いしよう、後輩くん。」

「うん？付き合う??」

「そう、いわゆる男女交際というやつだ。」

「はあ、そうですか……はあっ!？」

先輩の言うことを一瞬理解しかけた。
い、いきなり何言ってるんだこの人は!？



「な、何言って、どういうことですか!？」

「言葉通りの意味さ、私の彼氏になってくれ。」

「いやっ、なってどうするんですか!？」

「半分は君の悩みを解決するためさ。」

「もう半分は、私の興味だ。」



だんだん冷静になってきた。
俺の悩みはともかく、先輩の興味ってなんだ？

「興味ってなんですか？」

「うん。私にはあまり人が寄り付かないんだ。」

「今じゃ美術部だってこの通りさ。」



確かに、美術室には2人きりだ。
来なくなった理由も彼女なのかもしれない。

「それで、どうして付き合うことになるんですか？」

「うん。それは……。」

「私も、恋というものをしてみたいと思ってね。」



Hシーンサンプル




「ん、れるっ。」

「う、おおっ!?先輩それっ、おおっ!？」

「ふふっ、気持ちいいかい?彼氏くん。」

先輩が「ッウーっ」と舌先と唾液をまとわせた筆で舐め上げる。
すると背筋にゾクゾクっと快感が走り抜け、思わず背筋が反ってしまった。



「すごくビクビクしてるし、聞くまでもなさそうだね。」
「き、気持ちいいです。」
「どんな風に？」

少し意地が悪いかもしれないが聞いておこう、これも彼にとって大事なことだ。




「ちょっと触られたただけなのに、背中が反るくらい気持ちよくて。」

「なるほど、もっとして欲しいかい？」

「は、はい。」

「ふふふっ正直だね。」

言われるのは少し恥ずかしいが、正直辛抱たまらない。



「んっ、ふう、んう。」
「あっ、くうっ!!ふうっ、く。」

先輩がまた舌を這わせる。
再びゾクゾクとした快感が走って、ちん〇も身体もビクビクと反応してしまう。
確かに気持ちよくて嬉しいけど、でも、なんで先輩はこんなことを始めたんだ。



「ん♡れるっ、んんう」
「先輩っ、ううっあっ」
「ふっ敏感だね。」

舌先と筆で軽く触れているだけなのにおち○ちんも彼自身もビクビク跳ねている。
これだけで、こんなに反応してくれると責め甲斐があるな。そうだ



「ふうっ♡」

「おおっ、先輩!？」

「ふふふっ君は息だけでもこんなに反応するんだね。」

舐められて濡れたちん〇にふうっと息が這うように吹きかけられる。
ちょっとヒヤッとする感覚と舌や筆とは違う独特の感覚が気持ちいい。



「もう何しても気持ちいいんじゃないかい？」

「せ、先輩が上手いんだと思います。」

「ふふっ、それは光栄だね。」

特に経験もないけど、そう言われるのは嬉しい。
ふふ、正直に言ってくれたし、あまり焦らさずにサービスしてあげよう。




「ん♡なら、もっとしてあげよう。ほら。」

「ちょっ、先輩!! それっダメですっ」

「んう、もうイキそうなのかい? いいよ。ほらイッてくれ。」

先輩は褒められて嬉しかったのか、動きを早めてきた。
さっきまで結構限界が見えてきてたのに、そろそろ本気で追い込まれてきた。



「ううっ、くっ!!先輩、ほんとに射精ちゃいますっ」
「んう、いいよ。ほらイッて。」
「ああっくうっイキます、先輩っ!!」

私はさっきからの反応を見て彼のイイところを責め立てた。
すると——



「くうっイツくうっっっ!!!」

「ん♡ん、んうっ」

バキバキで痛いくらいのちん〇から勢いよく精液が吹き出した。
その間も先輩は舌と筆で責め立て続けてきてビクビクと射精が止まらない。



「う、ああ……はあ……はあ……。」

「ふふっすごい勢いで射精したね。」

「はあ、はあ……はい。こんなに、射精したのは初めてです。」

彼は息を切らして余韻に浸っている。

オナニーではこんなにならないのが、ふふっなんだかちょっと嬉しいな。



「んっ、んう。んー。」

「あ、ちよっ先輩っそんなの舐めてっ」

「ん♡別に、平気だよ。」

射精してちん○についた精液を先輩が舐めとっていく。
先輩が俺の精液を舐めとっていく様に、ちん○がまた昂ってしまいそうだ。



「ん♡ん、んう。」
「せ、先輩。飲んでる……。」
「んん。ん、なかなか飲みにくいね。」

先輩が俺の精液を舐めとって飲んでるのはヤバすぎる。
もう、押し倒してしまいそうなくらいに興奮してきた。



「ふふっほら、キレイになったよ。」

「あ、ありがとうございます……。」

「でも全然小さくならないね。」

「う、そ、それは……。」

舐めとってる時からわかってたけど、まだまだ彼は興奮しているみたいだ。



別にしてあげても良いんだけど、彼の悩みに対してはこっちの方が良いだろう。
まあ、ちょっとかわいそうだけど。こうして少しずつ欲求を募らせていこう。

「ふ、ふっでも今日はここのまじかな。」

「えっ、あっ、ああ……そうですね。」

「なに、また今度してあげるよ。」



続きは本編で！！